きっと君は輝ける

松山学院高
不登校経験者向けコース

中

苦い記憶 頑張る生徒に不寛容の壁

不登校経験のある生徒にとって居心地のいい空間づくりは、学校全体に広がった。契機の一つはNewコースが発足して2カ月ほどして開かれた全校集会。顔は出さない形だったが、コースの生徒たちが取り組んだ校内の清掃活動について発表した。ただ学校がきれいになるといった見た目の結果だけでなく、清掃が人の脳に与える効果などを図解で分かりやすく解説した。発表の完成度の高さに他のコースや学科の生徒たちは驚いた。クラスマッチで健闘したこともあり、全校でコースの生徒たちを温かく受け入れる雰囲気が徐々に生まれていったという。

コース設置の背景には、校長・吉田慎吾(64)の約30年前の苦い記憶がある。当時、吉田は松山市内の中学校で生徒指導を担当していた。不良と呼ばれる生徒たちへの対応が多かったが、中には素行が悪くないのに学校に来られない生徒もいた。何とか立ち直ってもらおうと、吉田は定期的に家庭訪問をした。生徒は当初、かたくなに心を開こうとしなかったが、やがて徐々に話をするようになった。

手応えを感じた吉田は学校と交渉し、空き教室を使って「不登校生徒の居場所」を設けた。課題は出さず、読書や勉強など自分の好きなことに取り組める場所にした。閉じこもりがちだった生徒が再び中学校に通うようになった。

周囲から「子どもを集めて遊ばせているだけ」と厳しい意見も寄せられた。それでも吉田は「さまざまな事情で傷ついた子どもたちが、通常の社会生活ができるようになるには時間がかかる。この場所はきっと必要だ」と信念を貫いた。

Newコース設立の経緯などを語る吉田慎吾校長＝5月、松山学院高

吉田の思いに応えるように「居場所」に通う生徒たちの表情が徐々に明るくなり、成績が伸びる生徒も現れた。しかし卒業が近づいた最終盤、思わぬ壁が待っていた。

教科の成績が優秀で進学を希望していたある男子生徒の進路がなかなかはかどらなかった。出席日数が少ないことが足かせとなった。県立高校は全く相手にしてくれず、県内の私立高校に何度も通い、入学できるよう懇願した。しかし、思いはかなわず、応対した教諭が最後に吉田に言った。「先生、もうこらえてや」―。当時、不登校の生徒に対する雰囲気はなかった。

寛容な雰囲気はなかった。

結局、九州の私立高校しか進学先は示せなかった。立ち直りをみせた生徒に向けられた厳しい現実に、吉田自身が打ちのめされた。

男子生徒に何度も「すまん、すまん」と頭を下げた。状況を悟った生徒は吉田に告げた。「先生、謝らんでええよ、俺、九州に行くけん」

月日は流れ、不登校は社会問題として取り上げられるようになった。吉田は2021年から松山学院高で勤務。不登校生向けのコース新設に取りかかった。県内の中学校を回って入学を呼びかけ、100人以上の希望者全員と面接した。生徒の生活状況を聞き、30年以上教育関係の仕事に携わった経験を基に普通の高校でなじめると感じると「他の高校でも十分頑張っていける」と励まし、別の高校への進学を勧めた。そして22年春、Newコース第1期生となる45人の受け入れを決めた。

(敬称略、宇和上翼)

◇

詳細は愛媛新聞ONLINE(Special)に掲載しています。